

時代の証言者

DJをしていたラジオ番組「全米トップ40」で、映画「ベン」の主題歌を歌う14歳のマイケル・ジャクソンのピュアな歌声に惚れ込んだのが、1972年。翌73年、東京音楽祭に特別ゲストとして「ジャクソン・ファイブ」が初来日、マイケルにインタビュする機会がありました。

茶色のコート、ロイの三つぞろいを着て、かわいらしいハンチング帽をかぶって、マネジャーの父親と一

音楽は愛 湯川 れい子 21



公演初来日したマイケル・ジャクソンが、後楽園球場で熱唱する（1987年9月12日撮影）

マイケルとエルビス論争

絶にホテルの部屋に現れたマイケルは、とても礼儀正しく、くろくりにした目を輝かせながら、質問にはきははきと答えてくれました。

好きなアーティストを尋ねると、ジェームス・ブラウンやジャッキー・ウィルソン、スモーキー・ロビンソン&ミナクルズなどを次々に挙げてくれました。歌が好きで好きで、彼らの音楽を聴いて熱心に勉強している様子が伝わってきました。ただ、1問答えるたびに、壁際で腕組みをしている父親の反応をうかがって、次インタビュしたの

は、82年3月、マイケルが23歳の時でした。グループ名が「ジャクソンズ」に変わり、81年にスタジオ・アルバム「トライアンフ」で全米を回るツアーを成功させた後でした。

マネジャーとして仕切ってきた父親と決別し、ビジネスパートナーを自ら選ぶ、音楽活動のやり方を根本的に変えつつあった時です。全身からやる気みなぎっていて、言葉には力強さが感じられました。

忘れられない会話があります。アルバム「トライアンフ」の中にある「ハートブレイク・ホテル」について、「エルビス・プレスリーは、82年3月、マイケルが

「僕たち黒人の音楽を盗んで有名になったんだ」と言い切ったのです。

私は食い下がりました。エルビスが社会からパッシングを受けながらも、黒人の音楽を自分の中に取り入れてロックンロールとして爆発させた土台があったからこそ、白人社会でも黒人音楽への理解が進んだのではないかと。それに対してマイケルは、私の目をじっと見据えながら、こう問

「僕たちは何も変わっていません。黒人のスーパーマンはいますか？ 黒い肌のピーター・パンはいますか？」

82年12月発表の「スリラー」は、全世界で売り上げ1億5000万枚を超え、ギネスブックは「史上最高のセールスを記録したアルバム」に認定している。

差別に対する強い怒りが、その後もずっと彼を奮い立たせ、数々のヒットを生んできたのではないかと思えます。でも、仕事で成功すればするほど、次々に広がるスキャンダルに苦しめられ、これ以降はジャーナリストのインタビュに答えることは一切と断念。いいほどなくなりまして。

（編集委員 永峰好美）